誹諧 百田鶴の跡

へ 5
1904

へ門
號
冊

序

松寿千歳に充決朽るといへとも西鶴百年の
今に雅名を存して名喧あまねく天下の
人の口に残り世に翁は其道時の風流は
世の知る所にして更にいふ迄もなけれとも
大句に旅てはいつまて此年に先けれは一日
千六百句を独詠し又延宝庚申乃夏
生玉堂前に幕をうち囲て四千句を独吟ある
当日の趣後大矢数集元ニ其序ニ見えたり

同し比三千風才麿一晶其外名ある諸士皆
終日数千句一万句さへ追て独吟せしとか
されとも大矢数誹諧と称する濫觴は此翁
也より又貞享改元乃年摂　住吉神前に
於て夏日一昼夜に二万三千五百句を独唱
して志るも悉く指上に残されさいきなと
これより二万翁と呼へしも巻頭乃発句
　神職たちも聞て息の根とめよ大矢数
東武乃其角も登つてこれを行ひ延に侍らふ里

蠅ならひ乃吟ありまその日難き席式出坐法
風客壮奈圓水可著述善集を著し
かくて霍翁の英名一挙千里乃いきおひ
有しかハ風ふ靡し群て随ひ此門ふ遊ぶ
ものゝ其負を知次とさいへ又餘力ある時
著述乃和書八十餘部こゝに資生の一助
飛家の階梯とす但是當流の第二祖也
今歳寛政壬子仲秋十日正當百年回ふ
席くしき遂之志願の事有初祖梅翁ふ至

我師蒼狐ハ六代乃発句将古左簾を主
加え各石ふ彫て日暮里の岡補陀山
養福精舎乃境内ふ造立し祇洗林
先哲の調を永世不朽ふ残さむ事を
同列乃二子と催ふおゐてハ社中の諸君
諸風士又ハ荷膽の誰かれかまたあるしふも
告まいらせ協ふ恩助芳志を寄せらる
日ならぬ事成ぬ書ハ行言先生洗筆を
倩ひ刻ハ中慶雲ふ刀を命しぬ乃傑ふ

営ミ玉侍る作ゝ此雪節の徳化普く及ひ
文雅乃冥加程真人ゝ且知足の判者をも
月の佳吟を乞て一集と綴し百回屋乃跡と
題して悉日法莚の几上に供し言葉の道ハ
程乃徳の光りも長く四方に傳へらん事を
祈りいしふこの文字ハ爽然日乃新久しく
古ふ不止まらむすを念して一陽井谷素外
扶肩石拜書
照せ石ふ百年の塚乃月も新

百回鶴乃跡

二祖
二万翁

鶡ハ花を見ぬ里も有児ふみ月
ゆかえこころとあす百子満月馬　素外
律の風人乃心やしまるらん　寶馬
狩さこの傍的も寄るくの覚　津富
なら人姿を禮ハ品花乃尽　左簾
ものもと思きぬ窗法嗜こ　宝馬

ウ
帆ばしらを買て山路に船の用　素外
ふと見えて日和になれる海る　左簾
くりくりと小豆八粉に練る玉露糕　津富
十月十指は菜屋の見世先　素外
人を待恋相惚く灯乃あかり　宝馬
身に賤の暑なるを見る秋　左簾
日ましに乾く露の光里の月草も　津富
見えし落開乃宇治茶の種　宝馬

童部に具物くさき雛しらま　素外
手のひらに人を夾みさし汐　左簾
晩鐘ちる浪乃雪渦さかり　津富
蜂の巣になりし鞆の明神　素外
十 壁塗や大工乃葉も昔今　左簾
かそらぬもの乏し結納の式　津富
内客に雪乃夜咄をしらべ次　宝馬
承さいくまる子御帰りやむ　左簾

補陀落や不陀も帝石ハ浪の中　素外
治まれる世乃善も目立次　宝馬
危ふかる試座を座の獨かな　津富
醉人いねて月ハ晴さま　素外
古雅残る琴を何と岩倉や　左簾
壺きもとる多みへ如渉　津富
白虹ハ立ても地下の氣ク身に　寶馬
文車申しかまら家の内　左簾

ウ
勧進も名のりて通る杜鵑　津富
天あいをせぬ忠臣乃虚　宝馬
照降をさしろみ占の米相場　左簾
今掃中へ状を投こむ　素外
咲かけて人目をらし法々の芸　宝馬
発起皆倶成就乃春　津富

題月

名月や兎をよける木賊刈　兎明
馬牽くもさらハ今宵りの湖　魚冠
更くやハ仙薬ねらん月乃空　安彦
秋は夜や月といふもの一向きはなし　東李
月さらく玉の露きや虫の声　息友
大佛も宗にさむる月見るや　李谷
月と清さてハ交し気樹の栗　楚明
月ハ真如乃玉子と梅花翁の句子も
笑らに骨き世界や露路り　沽頂

西雀の遠回に宗因より代々の発句乃碑造立ありて
名月や梅乃末ゟ思ハ去らり　十字
名月や月に瑠璃乃ちつ玉　春裡
名月や古き姿をなれとし　素月
昔より今宵をこの器量よし　如椿
名月や一夜柳にまとふ山　李嬰
玉造の舞臺にて
名月や押しまはし生駒山　艸蛙
名月乃まてまるきやはその四方　始暦
月ゟにてうかて漂ふものや人　真鯨

、名月や爽ハ疵せし屋根乃猫　月村

、懐舊

風流乃昔忘し月の秋　素纓

なのまてもしく月の光哉　井我

従ひ行月吹きるゝや西の空　和水

霞こ西客もたゝ霧ふ百年忌　春蟻

、懐旧偶作

月乃露ちゞむや百合乃葉末を　紫鳳

まうかなる往昔細工や松乃月　沾山

、百雀のむらし絵の追し月乃夜　雪齋

名月や海の果なるいなゐの里　冬英

ほくろくと月ふいおきや古人の意　五陵

、思ひ出す和哥に涼し月ふ残月　古 牛呑

此度病中ふ此句を猶らるよて今没後なりといへとも加之

、蜘乃囲ふ月かゝりゐる庭の松　平砂

、慕しき人乃跡追ふ月夜哉　鶏口

題月　追善　懐旧　立碑　偶作

さらひ祖翁の志を一営こ建る志を

発起　一陽井社中

照まさる月や昔乃まゝの流れ　栗堂

百年を千年に根組松の月　雅郊

さらに入る月や世界お目乃留　一鳥

月も露置ぬ夜更ハ秀に絶　素芹

入月をしたひ水らむ千島の松　素竹

我影の友ならぬ諸も月乃前　吐鳳

いはらや今宵に秋をしる空　素人

月あかり茶よか隠一人を呼　子蓬

名にし月半年にはまま磨きてや　素山

おもふ名は清いも月の谷深とを　逍橋

配りの谷許しくへかつら影　雀笑

森ら出ぬ月も京より菴の友　鳥色

新月や一夜に天窓ふさぎけり　麥圃

百年乃むかし偲らん秋の月　久吉　芦英

志ら浪居月の手張よけるゝ思　軽舟

今宵よいかく夜ハまろ涼し旅の月　雀舟

月かけや枝葉まそろく十六の林　亀文
おもふたるまゝ道清き月乃影　冠妻
世を安ふせし今宵の月も其の　文洞
月や今も古その葉に照る松ある　江永
水や空うつら文ある月ゝ宵　山鳥
玉川や昔さらせし　妹法月　何来
照や今むかし乃月も向の力　素仲
月見むと誘ひ業ある夜や星　素緑
名月や昼吠る犬秋かそ次　素云

月に虫も手向乃影や二万翁　麹人
星のさへ句に魂の月も石　素活
雪りや砂まろしと浅瀬川　金露
芋堂粉も宵の下たへ月をり　分香
月に法百味乃木の実あつめけら　女 紫蘭
棹さすや流るゝ月の綾瀬川　李克
待えひ月や笑ふも酒乃影　野幣
妹やむかし月八年の夛百年忌　芦錐
伏くむかしは見よそ高し秋の月　奥中村 素明

六欲を去て真如乃月すゞし　冬英

月に客を去年百年忌　如水

秋もこの里や月の夜遊　亀全

かゝるまハ百日清汐月の秋　素順翁

的とゝむるや月に向ふ矢数　可笑

秋寂中名や廣沢乃池に月　素周

月清し野の末ハ蛛の巣乃浪　長虹

夕月やまつ白しゝ小田の鷺　東潮

帆はしら乃木の間にありや佃島　一雪

京冬とかなる一の字月に捨小舟　江又

荃掃ふりても琥珀乃玉乃露　芦雀

月に雪ほとに光るや百とせまて　楚子

諸山我寂し次ハ隅田の月　三曉

露ちるまハ新に書一ツ松乃月　雪風

眩きを曲て我ものに見るや宿に月　百志

月ハ出汐青海原を武蔵野をも　東林

見るからくや秋乃眼にゐの月　羽州 素盈

名月や手に人もまち銀屏風　公佐

名月や天水桶を掌露盤　素磨

月見れハ志らぬ昔乃思ひを染て　呉龍

月ハ皆その照を蘿乃道の数　素玉

絶次照る年月新た古清水　女遊志

目に見えて暑代のさめる月夜かな　菊且

手向多ふ年も十とせ十日月　貴言

名月に茶やの里に老た顔　春瓜

年々ま又ゆるさなき秋の月　水蛙

人百年月ハ昔にかはらめや　己曲

流れむ身にハ出來ぬや月乃思　李杏

照添や月流瀬林乃百樹陰　素尺

我が助も出と川岸ゆや経の月　川町

武蔵野や笠着る取く其尾乃り　還童

野路を入ろく倖ゆる也月ふ延る　奉畏

屋根舟の居流しも伸ろし月と宵　可長

月天照らし清光元天下一　幡乃

うかまいて人を惜むや宵月夜　酔知

名を百年通し矢野や月の弓　藤尺素曲

名月や富士み焚火乃夜もきこえ　櫻男

予か此句さ、ひと年沾山の玉兎集に入集せしに篝火の誤よや
重もきこえとかきよてあらためて此集にそろひのせ侍る

月を友に俳の次老を花峯の松　桂男

言の葉ハ千々代朽せ次月乃秋　涼山

野も山も月影霊か此きらし　素琴女

月中乃ものよ聖中にも云川家　春律

山里て夜を平安乃海の月　豊後　岺嶺

たのしく詠め行くある霄みれ　女　賀童

むら鳥乃村雲過て夕月夜　呉外

象潟の月や西施に夕化粧　徒洲

夕月や庭籠の孔雀色ぞけに　素絢

草に露乃光りを兼ねし月夜風　山町

名月や肥りて見ゆる銅佛　素東

むさし野や関も流れも月乃もの　撰枝

碑の文字を千代あきやらと月見哉　女　里尾

夜もすから露やよし〳〵月乃為　加津

碑も新乃涼くなるし森の月　手布

雪も月に節もさりともはふれり　桐生　淳鳳

百とせや老せぬ姿発句と月　祇井
月際に新積る道程も千代　琴喜女
程し照月乃一夜清らや糠の風　花來
月ハ人のかゝるよ琴の唱歌よりも　千枝尼
せはしなく子子引まて三日月新　芝水
月しろや追来る一つ手も颯ひやこ　舟子
満ぬれと月に手酌や宿乃酒　李冠
何も我も催次いまた指向ひ　梛繁
月や此続く林の下陰毛　素悠

作く世界はし此月の照を今　其莫
名月乃ある乃汐ゝ川沖の珠　書來
白妙ぬしや清く／＼思ひ月乃霜　素后
月乃おいね乃も露も恵みの新　和交
古くなりし共や千石船子月見客　士藤
道にのし酒酔乃風も月の庭　住虎
新たいなり蓮見し池に月一輪　唯澄
寄る手向今宵うき世此月の宿　小金井 橋雫
月の夜ハ仏共申るむ山住居　露水

人ならハ世のし隠らむ月の友　蝶水
月百句手向む是も年乃数　蝶露
清し只性善なる水澄月　霞外
初祖ハ梅二祖吊ふ秋や松の月　素徳
煉らむ句を百年読れ月乃前　素全
かゝるからぬ月の詠めや十日法　万叶女
月ニ酒まゐらめむ一斗百年忌　憘隆
月と宵松もかしこもさくら陰　己禮
照月や天下一面雅乃読　寛之

新宮ニ浪花乃月も隣なる欤　素潤
なつかしき昔の空や月まさハ　素豊
古き月詠めむ松の下むしろ　歌明
百年のむかしもおけ涼し見ふ乃月　傳賤
百と勢れ色ても月其名の光り　雀子
月や禅の墨らぬハ名れ天下一　竹舟
石ニもの中ゆるや手ニふ月乃影　亀山
照れも名を見ぬ里ハ露のふれ月　玉川　素調
世を照し人も十昔十日月　鎌倉　英富

日暮しの名もよし月乃碑の佐書　亀長
月小露きかゝらみ安や草売粉　素英
いろふ照る名や月の秋氏世界　鷲里
百里乃外古人乃月を宴小吊　青羅
雲まち地子姿や庭茂り繁る月　東水
月の雪降へきう雲も聳き夜から　希言
見て色はる屋根子攫栝やかゝる跡のす　古友
是非月小五七五乃三ツ宗三五み夜　呉曉
雲ま手してらまい歎はし月乃容　如淵

白露をまとめてむや見ふの月　路洲
見上延八月も笑顔や紫奥まき　酒来
秋古く膝跡らしくちるます　鷹朝
月宮や古今八川も遠や古鳥　德富
かの里し八さく梅小二日月　可也
月や呈ほし公明るく由ほし人　李曉
谷月や未に八撓まぬ月み雪　素溪
公任の人了し見よるや夜中月　伴己
月小知るや百年前の古ころ持　行言

後五千堂
補助社中

題月　同

碑や月乃昔をよそに何かし　宝庸

蝉の聲は出てやりまくらし　宝驪

名月や草乃千種の花まくらも　江鳥

師は甚子碑の新諧女月夜かな　蒼巃

人やむかし見合八言まきのふは月　鳳尾

浪ゝ寿江の故人やしのふ乃江戸の月　宝驥

今年京浪花は月ハ見まぬ見ねと　蒼巃

百年乃昔も偲ふを月見かな　眠雀

傾にぬ月の出にしや百年忌　社水

汲とらむ流れや月乃新高し　卜人

紫乃戸を訪く人あれと偲ふの月　柏子

名月や浪志ろに孫乃海は面　其英

いかへの月や夕青はなけれ　晨風

照月は北新や世界をかいハものの　雀声

名月や石もまた古き島乃跡　可雄

打ぬ名をも月の洗ふや石の文字　如帆

明月や庭に松あつて流れ一筋　李朝

名月や流れを待ひ影をそゝく　湖遊
其姿え作けハ廣し兄ふの月　髪々

題月　同

うすくもはけて雲間の月さ香　神助
姸齋社中
名月や雁路たつのしき芸蕎　其葉
百とせもかそらぬ多や松の月　公鬡
月よ秋李郭ハ爽をおもふらし　桃壽
詩や哥やいみし人まを月の友　昶富
　松舎

禅やさらに照らまそ文字の月　蓮子
月や昔いみし人を今も友　貫時
見あかして百とせや其の月影也　沾座
侍乃百日と都ふるとあらし乃雪　何焉
古き照や浪花の昔月の友　田楼
者の名とも月夜烏乃こゑなくり　雨橋
百とせの昔はさつとや月と夜　津蛙
西山や月影ふるさとの千鄉を　芦風
我の身くや玉江乃月も斗十秋　懐鯉

在其生涯月も二萬翁　雀童

古道や百里十かも月の比　宜富

題月

神助社中
墨齋

音ハしの淡や樹ともる月今宵　伴侶

名月や公にて星申る雲乃風　長雅

まむりや耳みまれにて目出現　二鏡

降露も星申るおもしやりいの月　葵藁

名月や塒たとか申る鳥もみ　如雲

照月小星乃かくるる今宵かな　文綾

名月や四方小清める人ころ　喜雪

名月や小そも森山夜の舟礒　梅賀

まれの左さ如印代やり今宵　燕府

月のころ星申も清る露たち　内業

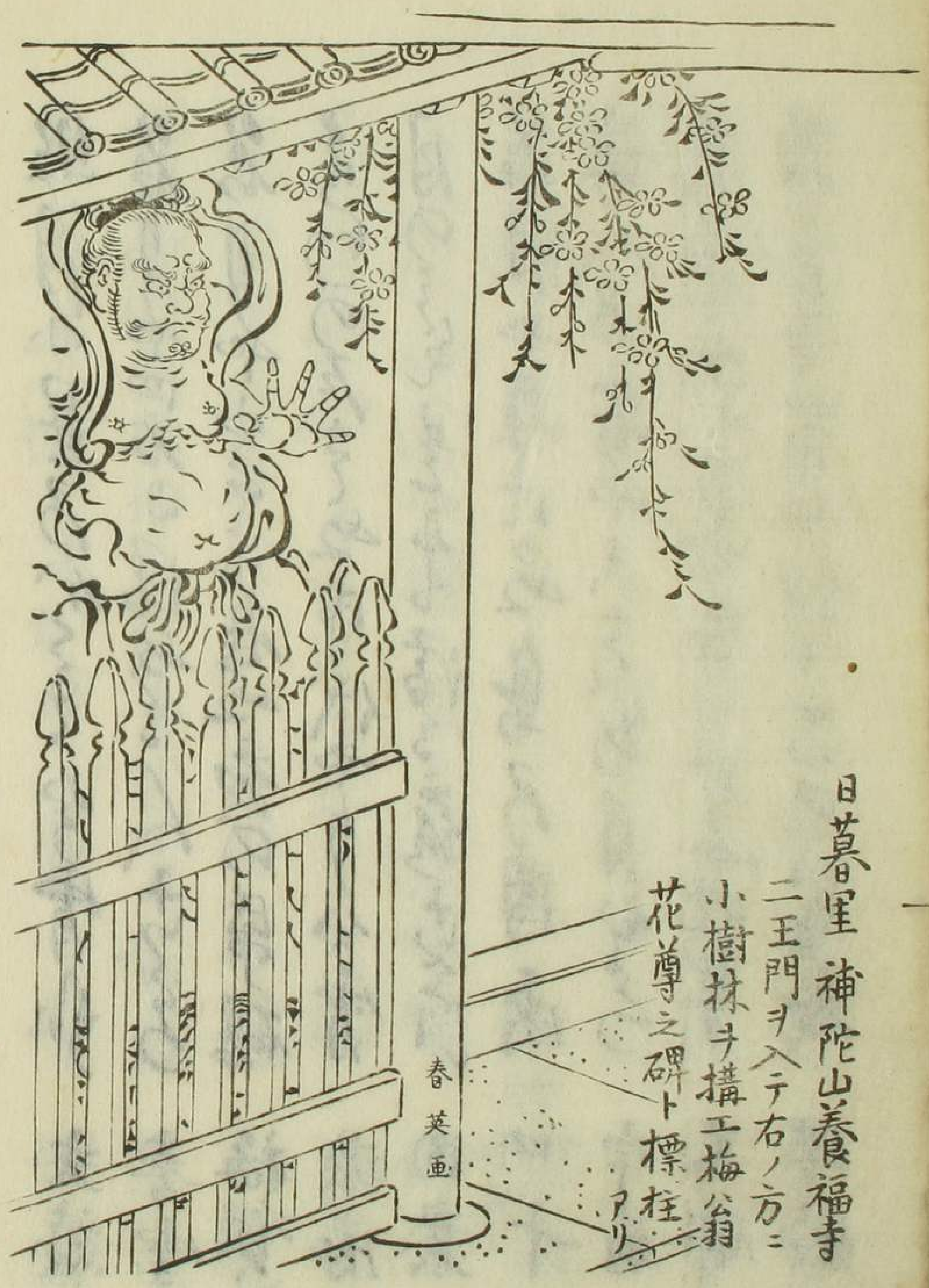
名月や森を如鳥乃図雨　口十

詠人乃客やたちいの月ころ　守扇

鳥もさ外小葉かしらやけり　不醉

名月や百日紅もナいのひと枝　環齢

日暮里 神陀山養福寺
二王門ヲ入テ右ノ方ニ
小樹林ヲ搆エ梅翁
花尊之碑ト標柱アリ



○大碑 正面
於我何有哉
江戸をもりて鏡と也誓子樽
誹談林初祖 梅翁西山宗因

同 左ノ横
我戀乃松嶋も嘸初のまゝ二
二祖 松壽軒 西鶴

少そもあら松の命を山はてら
四祖 曲菴 玄哲

何まくと夜乃紅葉や鹿の声　六祖 五千堂 蒼狐

同　右ノ擴

時雨るゝめ黒木すゝむるハ何ゝく共　三祖 狂六堂 才麿

名月や何に其の隅小杜宇　五祖 活井 舊室

獨居子訓てかましいふんすいとも　中興庵門 古堂 左簾

裏ニ七叟ノ忌日ヲ記ス梅翁百年香ニ出セハ畧ス

○副碑　左ニ添テ建但蓼形ナリ

表二方　發起 玉池 谷素外
補助 誹諧林總社中

裏二方　寛政壬子仲秋立
石工 中慶雲

○小碑　右ノ方前ヘ五尺計去ル但此碑ハ一陽井社中ノ發起シテ立ル所也
正面

三日月小見て置月の海ニあら　後五千堂 寶馬

知るもの八月乃こ起我独笑こ　一陽井　素外

夜も秋也名月小戸を敲く音　妍齋　津富

名月やちらめくて揺さゝろ　幽雲齋　左簾

右ノ横ニ宗因流畧傳ヲ記ス是亦百年香ニ出ス廿八爾之裏ニ

是歳壬子之秋上距井原西鶴翁之没ヲ實ニ一百年矣吾カ一陽井主翁首ニ倡ヘ其事ヲ刻ス

鼻祖洎ヒ先哲ノ發句各一章ヲ干貞石ニ碑シテ而傳フ爲旁ク求テ諸公名緣之什ヲ別ニ錄シ爲ス卷ト吾カ翁原始追遠之志勤メリ矣於是我輩摭テ彼卷中ニ取ニ題スル更ニ採擇シ師家四老集中ニ咏ルノ月ヲ句ヲ對ツ大碑之側ニ旌ス其由ヲ爾

門人某等謹書

○追加

置や露月小路る石乃艶　視月

名月やあるも皆花草も花　桐生　玉江

新くまむ末清川の秋乃月　後五千坐社中　漁舟

時哉二祖二万翁西鶴乃百年囘り月ふ
類して其集を著ハせる事やいとめつらし
始祖梅翁宗因より代々の發句の碑
造立さんとなる事や是發起乃丹誠
神助の懇勤もいとく供養の祝筵を
宗匠に會けて道の法燈を耀し先哲の
餘光を赫奕ならしむる事百年法
今日是のを今日乃百年といふも亦
是によりてたる筆を走らす新なものならし

花乃初祖月の二祖又千代の秋　寳馬

月乃明らかなるに向ひて雀翁法
避世の句をおもひ吟せバ百とせ乃
むかし見ぬ世の人は顔色形容さらに
相對し語らふ心地せられ侍る

月や霊へとの紫月の十日佛　津富

二祖西雀翁折ふしてハ仮名草紙

なほとなく繁昌し中にいろへに答ふる
盃持男者を味方として閻王宮裡ア
貴入し筆の御き世人に異を撰さセし
方便乃徳ますそ今彼國に安樂の
身ならんとおもへハ
鶴林の月いや照せ小夜ゆらし　花簾

西鶴發句集　追而梓行

照山文庫

[illegible]

西鶴か発句を[illegible]

貴人[illegible]の俳諧[illegible]世人に[illegible]

若俊乃徳[illegible]今祇園に[illegible]の

[illegible]すならんとおもへハ

俳林の目いや[illegible]山[illegible]

西鶴発句集　近刻梓行

[illegible]山文庫